

取組実績の概要（2 ページ以内）

本事業の取組

アクティブ・ラーナーの育成に向け、A：授業改善、B：授業外学修支援、C：学修行動の促進、D：学修成果の可視化を推進してきた。領域 A、B は連動させ、その成果として領域 C、D で評価し、その結果に基づき領域 A、B を改善し、4 領域の事業を円滑に推進するための組織間連携と評価・改善のサイクルの構築を図ってきた。図 1 は 4 つの領域のフローチャートであり、図 2 は AP 事業の実施体制である。

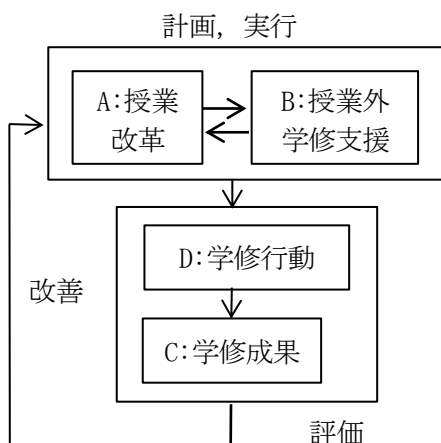


図 1. 学修行動と学修成果の評価による改善

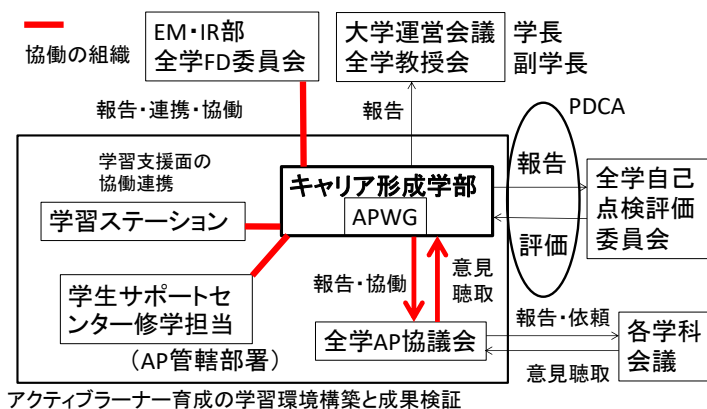


図 2. AP 事業の推進体制

本事業の取組状況

領域 A で、全学共通の初年次必修科目を中心に、クリッカーやペアワークなど多様な授業形態のアクティブ・ラーニングを推進した。たとえば「シチズンシップ」で、原発再稼働など賛否の分かれる論争的問題をテーマに深い学びを促した。「京都光華の学び」では、学習習慣の形成、学び技法の習得などを目的に、「レポート作成の資料集」を全受講生に配布して指導した。平成 29 年度より、各学科でのアクティブ・ラーニング実施状況を EM・IR 部が調査し、分析結果は FD 委員会及び各学科で議論し、授業やカリキュラム等の改善を図った。令和元年度は、学生に複眼的思考、深い思考などを促す質問型授業 (QFT; Question Formulation Technique) のワークショップや実践報告など行い、全学的に推進した。

領域 B で、中間層以下の学生が学習習慣、学びの技法を身に付け、学習・学修マネジメントできるようになるために、授業で負荷の高い課題を提示し、学習ステーションで教職員、ピアチューターが個別指導を中心とした授業外学修支援を行った。授業担当教員と学習ステーション教職員との連携が重要となった。1 日あたりの学習ステーション来訪学生数の平均は、平成 26 年～平成 30 年度で、それぞれ 75.7 人、87.7 人、105.8 人、107.2 人、98.7 人と増加した。

領域 C で、ルーブリックの導入により、学生は事前に明示された学習成果の基準を理解し、高い評価を目指して課題に取り組む学習態度が形成された。「京都光華の学び」で、学生は添削レポート、ルーブリック評価、減点表に照らしてレポートを推敲し、大学での学び技法をアクティブに習得できた。基準に満たない学生全員に再提出を義務づけ授業外学修支援を行い、全初年次学生の学び技法を定着させた。

卒業時の質保証に向け、ディプロマポリシーのルーブリック表を全学科 4 年生が回答し、その結果を EM・IR 部が分析して、各学科会議、FD 委員会で共有、議論した。平成 29 年度から卒業論文のルーブリック評価を導入し、分析結果から学生指導上の検討点を明確化し、授業内容や学生指導などの改善につなげた。平成 30 年度は卒業論文と、その取組の学修行動の両方をルーブリック評価した。

領域 D で、授業内外学習の学習態度や行動について、本事業で開発したアクティブ・ラーナー水準調査を全学の学生を対象に実施し、その結果を個別学生にフィードバックした。分析結果は、計画立案力、論理的思考、学びの自発性など 8 つの指標について、全学の学生の偏差値と自分の評定結果が比較でき、毎年度実施のため経年変化も比較した。調査結果はクラスアドバイザーも共有し、個別指導などに活用した。アクティブ・ラーナー水準の高い学生は、GPA も高い傾向が強く、学習行動・態度と学修成果の明確な関連性が見られ、これらの指標の値を向上させるための学生指導や学習環境構築について議論した。

(テーマ：I、大学等名：京都光華女子大学)

平成 26 年度以降、取組成果の学内外の波及に努めた。平成 26 年度から平成 30 年度まで毎年度、AP 成果報告会を開催した。平成 27 年度から平成 30 年度の報告会テーマはそれぞれ、授業外学修支援（領域 B）、授業改革（領域 A）、アクティブ・ラーナー水準調査（領域 D）、ループリックを含む学修成果の可視化（領域 C）であった。アクティブ・ラーナーとして学生も登壇、発表、司会担当し、来場者から好評を得た。平成 26 年度から令和元年度まで毎年度、AP 年次報告書、成果報告書を発行し、学内の AP、FD 関連の教員や関連部署や、AP 採択校などに配布して学内外での共有を図った。

### 目標の達成状況

令和元年度において、「AL を導入した授業科目の割合」は 42.5%であり、目標の 46.9%に近づいた。カリキュラム改革で、必修科目をコア科目に限定し、選択科目の比率を高めたことから、「AL 科目に占める必修科目数の割合」は 36.8%と目標値を大きく下回った。しかし、「学生 1 人当たりの AL 科目受講数」は目標値を上回る結果であり、学生は選択科目で AL 科目を履修して主体的学びを促進させた。

学科会議や FD 委員会、FD 研修会、AP 協議会などで、積極的な学びを喚起する多様なアクティブ・ラーニング手法について議論を重ね、「AL を行う専任教員の割合」は 6 年間継続して 100%であった。令和元年度の前期・後期の「学生の授業評価」の結果に基づき計算した、「学生 1 人当たりの AL 科目に関する授業外学修時間（1 週間あたり）」は、4.7 時間であった。目標値を大幅に下回ったが、学習ステーションや各学科コモンズで学修支援により、授業外学修時間の量的・質的な向上を図っている。

### 取組の成果

本事業の主な成果は、以下の通りである。

- ・初年次必修科目のアクティブ・ラーニング化による学習習慣の形成、基礎学力の養成による、中間層以下の学生の学習・学修マネジメント力の向上
- ・領域 A から D の推進を通じた評価・改善のサイクルの構築による、改革力の質的向上
- ・個別学生の学修成果の可視化とフィードバック、学修支援に関する全学的な共有と実践
- ・学科間、部署間の組織間連携と教職協働の強化
- ・以下の①、②による学内外の AP 成果の波及：①平成 26 年度から 30 年度の 5 年間、毎年度の成果報告会の開催、年次報告書の作成・配布、②令和元年度に、成果報告書、学習ステーション ピア・サポーター活動報告書の 2 つを作成、配布
- ・本事業の成果の学会・論文等での公表による AP 研究の進展

### 補助期間終了後の展開等

卒業時の質保証の向上につながる女子大学での教育方法を研究開発し、「光華メソッド」として確立、学内共有していく。EM・IR 部や FD 委員会などと組織間連携を強化し、アクティブ・ラーナーへの変容に影響する授業内容・方法、学習環境など、全学共通の初年次科目を中心に本事業を発展的に継続推進する。

#### 【必須指標の達成度】

	平成 26 年度 (起点)	令和元年度	
		目標	実績
AL を導入した授業科目の割合	36.6%	46.9%	42.5%
AL 科目のうち必修科目数の割合	39.7%	60.0%	36.8%
AL を受講する学生の割合	100%	100%	100%
学生 1 人当たりの AL 科目受講数	10.1 科目	12.1 科目	13.7 科目
AL を行う専任教員の割合	100%	100%	100%
学生 1 人当たりの AL 科目に関する授業外学修時間（1 週間あたり）	2.8 時間	15 時間	4.7 時間

※AL：アクティブ・ラーニング